

文化

Culture

波乱の伝説語り継ぐ

「ナポレオンの柳」出版

アメリカ人の死生観や墓地の歴史などアメリカ研究に取り組み専修大教授、黒沢真里子さん(館林市)が「ナポレオンの柳―西洋人と柳、墓地、ピクチャレスク」(彩流社)を出版した。流刑地のセントヘレナ島(イギリス領)にあるナポレオンの墓は、メランコリーな雰囲気の下にあった。そのイメージが世界中に広まり、英雄としてのナポレオン伝説に「柳」が大きな役割を果たしたことを独自の視点で解き明かしている。

(斎藤雅則)

柳の中でも最もポピュラーなシダレヤナギは東アジア原産で、なぜ南大西洋の絶海の孤島、セントヘレナ島にあったのか。ヨーロッパに伝わった柳は、ロマンチックな景観に欠かせない樹木として西洋人の心を捉えた。同島にはイギリスの東インド会社が自国の樹木や植物を持ち込み、ナポレオンが流刑になった時点では、イギリスの風景が作り上げられていたと解説する。

ナポレオンは、島の中の最近くの柳の生えた谷間を好み、柳の下で瞑想したとされ、本人の希望で埋葬場所ともなった。亡くなる前、新聞や雑誌などで取り上げられ、墓の様子が絵に描かれ、語られ、歌に歌われた。当時、スエズ運河の開通前で、物資の補給に多くの船が島に立ち寄り、乗船者

専修大教授

黒沢 真里子さん



「ナポレオンの柳」を出版した黒沢さん

くろさわ・まりこ 1976年、津田塾大卒。米ペンシルベニア大大学院留学を挟み、80年に筑波大大学院修士課程修了。99年に桜美林大大学院国際学研究科博士課程修了。学術博士。専修大教授。館林市在住。

追悼、再生の象徴 解明

表紙に柳の下のナポレオンが描かれた「ナポレオンの柳」



墓園にもたくさん植えられていたことが出発点だった」と振り返る。

研究を進める中で、柳はアジアからヨーロッパ、そしてアメリカへと伝わり、追悼や再生のシンボルとなったことを突き止める。「そのような柳と追悼文化のハイライトがナポレオンの柳であった」と話す。日本では、ナポレオンの柳はほとんど知られておらず、ナポレオンに関する研究や書籍でも柳に着目したものはなかったという。

2000年に「アメリカ田園墓地の研究―生と死の景観論」(玉川大学出版部)を発売。この時の研究成果を踏まえ、アメリカで、柳の植えられたピクチャレスク(絵画のように美しい)な景観の田園墓地が広まり、時代の流れの中で変容していく過程も解説している。

四六判、191頁、330円。

ジェンダー平等が求められる社会で、「フェミニズム」に改めて注目が集まっている。一方「私には関係ない」と考える人も多いだろう。金沢21世紀美術館の「ぎこちない会話への対応策 第三波フェミニズムの視点で」展(3月13日まで)は、そんな人でも気軽に足を踏み入れ、フェミニズムについて一緒に考えられる展覧会だ。

本展はキュレーターを務めたアーティスト、長島有里枝の「わたしはフェミニストじゃない」と思っている人へ」と題するステートメントで始まる。長島は自身の活動を振り返り、フェミニズムの実践を担ってきたのは必ずしも「フェミニスト」だけではないと強調。作家と対話を重ね、展覧会やフェミニストの在り方についての「暫定的な対応策」を本展で示した。

だから、男性作家や「フェミニズムアート」ではない作品も含まれ、決して、一つの考え方を押し付けるわけではない。

例えば、小林耕平の「殺・人・兵・器」

金沢21世紀美術館「ぎこちない会話への対応策」



小林耕平「殺・人・兵・器」(2012年、作家蔵©Kohei Kobayashi, Courtesy of ANOMALY, KIOKU Keizo撮影)

は、日用品を組み合わせた「オブジェクト」に、身体を死に至らしめる「兵器」の役割を言説的に与えていくパフォーマンスだ。渡辺豪の「ませませの山」は、自らと家族

るものは何なのか、見る者に問い掛ける。こちらもフェミニズムを声高に訴える作品ではないが、長島によれば、小林作品はジェンダー規範を含むあらゆる価値基準が解体・転覆可能であると鑑賞者に気づかせ、渡辺作品は作家が家庭内で感じる葛藤やジレンマの象徴であるという。展示を目前にして、それらを緩やかにつなぐ長島の視点をたどるうち、自分も対話に参加している気がしてくる。これまでの観念が崩れ、フェミニズムとは誰もが語ることを許されているテーマなのだと言及された。

同館では並行して「フェミニズム」展も3月13日まで開催。女性のためだけではなく、社会に違和感を持つあらゆる人たちのものとして、フェミニズムが複数形で語られ始めた現状を、作品を通じて提示する。実はこれらの展覧会は当初、一つの企画として構想されていたが、キュレーターの考え方の違いなどから別々に開催されたという。そのこと自体、フェミニズムに正解はないという態度を具現化している痛快だ。

(敬称略)

多機能化した墓園 米

日本では、少子化により墓の継承が難しいという課題に直面し、墓地の在り方が見直されている。アメリカでは19世紀、生活圏にあった墓地が飽和状態となり、自然豊かな郊外に宗派にとらわれない「田園墓地」が造られていく。美しい記念碑や彫刻が置かれたイギリス風景庭園でもあった。死者の居場所を確保し、生者には死者を思い、瞑想に浸れる場所となった。その後、野外博物館や美術館、植物園といった機能を付加された現代のパーク型墓地が生まれる。黒沢真里子さんは「多機能なアメリカの墓園は、日本の墓地再編の参考になる」と指摘する。